

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

(宮古・大槌・釜石・障がい者センターかまいし・大船渡・米川・石巻・福島デスク・原町・もみの木・CTVC)

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

原発再稼働を東日本大震災被災者、その他多くの人々が心配している今、「せめて、ライオンのレベルに」なるようにと話すのは、矢吹貞人助祭。気仙沼南町商店街は、本建設の商店街を目指し、奮闘中です。以前から支援してくださっているパリ日本人会の励まし、そして、ネパール救援のために、国際カリタスが活動中です。ご支援をお願い申し上げます。

あなたも、自分で判断し、選び、
行動することができます
そして、せめて、ライオンのレベルに

4月25日(土)、福島市のカトリック野田町教会信徒ホールで、「福島で生活するにあたって放射線に関する学び」と題して、さいたま教区事務局長の矢吹貞人助祭を講師にお招きし、わかりやすく放射線について基礎的なことを学ぶ勉強会を行いました(福島デスク主催)。

矢吹助祭は、終身助祭に叙階される前は群馬大学教授で生物物理学を教えておられました。主催者の福島デスクは、福島県内に生活する人々にとって、放射線問題は避けて通れない問題としてあり、右から左までさまざまな意見や主張が飛び交うなか、各自が正しい知識を持ち、自分の生き方を選び取る必要があるということで、勉強会が企画されました。参加者は、遠くは横浜から、近くは福島県内の各地から、52名が参加し、信徒ホールが満員となりました。



【矢吹助祭の講演内容】

まず、わたしたちがいただいているいのちは、この地球という小さく美しい惑星の中で誕生し、育まれたものであることに目を向けるように。46億年前に地球が誕生してから現在に至るまでの歴史を1年に縮めて考え、作成された「地球カレンダー」の説明から始めます。

地球カレンダーによると、現在の人類の祖先が誕生したのは、12月31日14時30分のこと。産業革命は、大晦日の23時59分58秒であり、今、私たちが享受している文明・文化は、「地球カレンダー」の最後の2秒間の出来事、つまり、今、私たちが抱えている環境問題、原発の問題、核廃棄物処理問題などもすべて、この最後の2秒間の出来事です。

46億年前の誕生からまもない太古の地球は、まだ放射性元素がたっぷりの状態で、これが徐々に崩壊し、現在は放射性元素がきわめて少ない穏やかな地球になっています。よって、生命にとって地球は、「放射線のゆりかご」と言ってもよく、生物の誕生から進化まで、いつも放射線のある中で進んでいったのです。

その結果、地球上の生命はすべて、放射線の影響の中を生き抜き、進化できたもの、別の言葉で言えば、放射線に対しての備えを持った生命だけが残っているのです。それは遺伝子として、DNAと呼ばれる美しい二重らせんの構造をした巨大なひも状分子を持っているものだけです。

一見、柔らかくて、簡単に潰れそうで、弱々しく見える生命(人間も)が、実は放射線に対しては「すばらしい備え」を持っています。年間1ミリシーベルトの放射線を浴びるとすべての細胞中のDNAのど

こかに1つ傷が付くと考えられ、弱々しく見える人間も、ある程度の傷なら、何食わぬ顔で治せる能力を持っているのです。(遺伝子の図式を示しながら、放射線によって細胞の中の遺伝子に生じた「傷」が見事に修復される仕組みを説明された。)

(自分の住んでいる場所で、専門家にお墨付きをもらわなくても自分で判断することができる方法を話され、)何でも専門家に頼ろうとするのはやめて、ぜひ、それを使って自分で判断し、選び、行動してほしい。

最後のスライド、「せめてライオンのレベルに」。このことばには、原発に本当に別れを告げるには、原発に関する技術の未熟さや山のような未解決の問題のこと、原発事故のもたらす悲劇などをいくら強調しても、片や、そんなことは目をくれず、何のためにか自問することなく、ただただ経済発展を追い求めようとする巨大な欲望には勝利することはできない。勝利する道は、私たちの現在の生き方を問い直すこと、豊かになりすぎるほど豊かになった私たち自身の生活にブレーキをかけ、世界中の飢えに苦しむ人々のことに思いを馳せ、巨大な欲望の暴走に「ノー」を言いましょう、との願いが込められています。ライオンは、自分のお腹がいっぱいになると、おいしい動物が目の前を通っても、襲うことをしません。私たちも、せめてライオンのレベルになりましょう、と話され、講演は終了しました。

その後、昼食をはさんで、質疑応答、意見交換の時間があり、有意義な勉強会を終わりました。



矢吹助祭による講話の様子

気仙沼復興商店街「南町紫市場」 これまで と これから

東日本大震災の地震・津波の被害を受けた宮城・岩手にあった多くの商店街は、そこから立ち上がろうと苦闘し、店主さんたちの努力が実り、各地で仮設復興商店街がオープンしました。

その中で、カリタスが支援団体として第1回目の会議から継続的に参加し、2011年12月24日にオープンしたのが、通称「南町紫市場」と呼ばれ親しまれている気仙沼復興商店街です。あれから4年目を迎え、仮設商店街の5年という退去期限が徐々に近づいているなか、南町紫市場は、今、どのような歩みをしているのでしょうか。坂本正人副理事長と事務局の遠藤久美子さんにお話を聞きました。

【南町商店街事務局 坂本正人さんと遠藤久美子さんのお話】

震災前、南町商店街は100店以上の飲食店が並ぶ市内随一の繁華街でした。ところが、津波により、この町が壊滅してしまったのです。約1,000人の人が、地元の自治会館(紫神社)に避難しているその生活の中で、若手店主の結束力が強まり、次第に「南町紫市場」の構想が生まれ、着々と準備を重ね、実現に近づき、7棟の仮設商店街に52店舗を開くまでに立ち上がったのでした。

「オープンから丸2年の間は、連日、観光バスが何台も連なるように来てくださり、おかげさまで大変賑わっていました。私たちも忙しく、活気に満ちて働いていました。ところが、昨年12月ごろからお客さんが徐々に減ってきました。日曜、祝日はまだいいのですが、週日は、観光客の姿はぐんと減りましたね。でもね、地元の人が気仙沼に戻って来るとともに、仕事帰りに立ち寄ってくださるようになったのは、うれしいですね」と坂本さんが現在の明暗を語ってくださいました。

商店街の中にあったイベント会場も、以前は毎週のように開かれていたコンサートや落語などの催しが行われなくなり、今は駐車場になっていました。

「来てくださる人が減っていくにしたいが、どのお店も今後のことを自然に考えるようになりました。今後のこととは、もちろん本建設の商店街のことです。1カ所にさまざまな店が集まっているのが、商店街の魅力です。ですから、いろいろ調べ、ここから南へ少し移動したところへ本設の商店街の用地を見つけました」と、坂本さん。

仮設商店街をオープンするまでの苦労を、再び坂本副会長と遠藤さんが事務局を引き受け、今度は本建築の商店街「気仙沼内湾商店街」の実現に向け、頑張ることになりました。坂本さんは、コロッケ店を奥さんに任せ、自分は事務局に入り、各商店をまわり、この新しい商店街への誘致を訴え、役所との話し合い、手続きなどをこなす毎日が続きました。



気仙沼復興商店街のお話を聞かせてくださった
遠藤さん（左）と坂本さん（右）

その努力が実り、国の補助制度の商店型グループ補助がもらえることになりました。しかし、商店型グループ補助は、国から16億円の援助を受け、そのうちの4分の1である4億円を返済するという援助です。

計画当初は40店舗ほどあった入居希望ですが、家賃の負担が現在の10倍近くになることから、他の物件を探すことにした人、移転を機に、「後継者がいないから廃業するほかない」という人、「この先、何年間商売をやっているか分からないので、見切りをつけるほうがいいと思い…」と言う高齢の店主などがおり、最終的に、現在の南町紫市場の店主の中で新しい「気仙沼内湾商店街」への入居を決断した人は、24店舗しかありませんでした。

被災前の商店街は、「気仙沼一の繁華街だった」と言っても、過疎化が進み、売り上げが出せないで苦しんでいた店もありました。しかし、この復興商店街で、どの店も震災前よりお客さんが増えました。4年目を迎え、観光客が激減した今、何もしなくても観光客が来てくれる状態に慣れ、自分たち商店の側も地震・津波を忘れ、風化してしまっていたという反省をしました。一方で、固定客確保のために経営努力をした店は、観光客が減った今でも大きな痛手はなく、それなりに店を続けているのも確かです。

そこで、「気仙沼内湾商店街」を、「南町紫市場」からの24店舗を中心に、魚町地区の店も一緒になり、31店舗からの出発で計画を建て直すことになりました。

広場を中心に造り、そこを囲むように商店街と復興住宅が建つ計画で、今年の9月着工、竣工まで1年間はかかる予定です。新しい商店街ができるまで、ここで商売を続けさせてもらうように、市と交渉していかなければなりません。

「新しい商店街を魅力あるものにするによって、お客様は来てくださるのではないかと期待しています。」と希望を語る坂本さんと遠藤さんの姿は、被災から立ち上がり、商店街の人々を思い奉仕している謙虚さに輝いていました。



気仙沼「南町紫市場」の現在の様子

パスカル・マルソーさんコンサート

「大震災被災者のため、支援活動に携わっている人々のためにささげます」

5月2日(土)、仙台教区カテドラルであるカトリック元寺小路教会において、パスカル・マルソーさんのパイプオルガン・コンサートが開かれました。

演奏会に先立って、マルソーさんは、東日本大震災で亡くなられた方、被災を受けた方、そしてその支援活動のために奉仕している人々、サポートセンターやベーススタッフへの激励のことばを述べ、被災された方々のことを心に留めて演奏したいと挨拶され、聴衆の心に感動を与え、温かい風がながれました。

そのような挨拶に、全然思いもよらなかった通訳者は、感激して胸がつまり、声もふるえての通訳でした。コンサートに来た人々も驚くと同時に、「マルソーさんのやさしい人柄に触れた思いがしました」と語っていました。

若手演奏家として有名なマルソーさんの演奏に、カトリック信者だけでなく、プロテスタントの信者の人も、パイプオルガン演奏者たちも、やさしい音色を奏でる演奏に心打たれたひとときでした。

この裏には、コンサートに関わってくださり、教会側の通訳を務めてくださったエメ神父様の働きがありました。演奏会当日の昼食時、エメ神父様が、東日本大震災の被害のこと、教会の支援活動のことなどを伝えてくださっていたのです。マルソーさんは、時間のなかで、演奏会が始まるまでのちょっとした時間を利用して、仙台教区サポートセンターを訪ねてくださり、これまでの支援活動について尋ねられたり、スタッフにねぎらいの言葉をかけてくださったのです。



フランスから福島へ 鯉アートのぼり

「Koi 鯉 アート のぼり」運動へ継続的に参加しているパリ日本人カトリックセンターの佐々木真紀さんから次のようなメールが届きました。

「福島の子供たちに元気を」と震災以来、フランス人たちに鯉のぼりの絵を描いてもらい、福島に送り続けています。この度、正式にこの運動が日本の小学生の図工の本に載りましたことをご報告させていただきます。

先日、パリの南郊外にあるソー公園で、八重桜に囲まれながら、子供たちが福島の子供たちを思い、たくさんの鯉のぼりを描いてくれました。今日、5月5日のこどもの日もパリ郊外で、鯉のぼりワークショップを開催します。

被災者の方々に、フランスからも皆さんのことを思い、応援していることが少しでも伝わればと思います。 (佐々木真紀)



思いのこもった鯉アートのぼりをもつフランスの子どもたち

◎「Koi 鯉アートのぼり」運動について

「Koi 鯉アートのぼり」運動は、福島大学芸術による地域創造研究所が震災直後、福島の子供たちを元気づけようと、避難所や学校などで、こいのぼりに色を塗ったり絵を描くワークショップを開いたことがきっかけです。

子どもたちの立身出世、成功祈願の意味が込められている「鯉のぼり」を復興のシンボルになぞらえ、鯉が龍となるように、明日に向かって登るエネルギーを子どもたちと一緒に育み、余震や放射能という「目に見えないもの」の影響や不安な気持ちを、アートという「目に見えるもの」の力によって勇気づけたいとの思いが込められている活動です。

活動をホームページで紹介し、広く海外にも呼びかけたところ、美術家や世界各国から多くの鯉アートのぼりが集まり、現在までに集まった鯉アートのぼりは、3千点以上にのぼるそうです。

詳細は、ホームページ <http://wa-art.com/koi/> をご覧下さい。



大人から子どもまで、鯉アートのぼりを作りました

〈ネパール大地震〉 救援募金のお願い

4月25日にネパール中部で、マグニチュード7.8の大地震が発生しました。余震による被害も含めると死者は8,000人を超え、被害の全容はまだ明らかになっていません。

現地ではカリタスネパールを中心に国際カリタスが協力して救援活動を行っています。(カリタスジャパンのサイトから、現状や活動について写真で見ることができます。)

カリタスジャパンは、この救援活動に協力し支援を行っていくため、募金の呼びかけを行っております。募金受付口座は次のとおりです。

■ 郵便振替番号：00170-5-95979

■ 加入者名：カリタスジャパン

※ 通信欄に「ネパール地震」とご明記ください。

※ 「ゆうちょダイレクト」インターネットサービスでの募金の際は「ご依頼人番号」欄に、ネパール募金のコード番号「6271」をご入力ください。

※ カリタスジャパンのニューズレターの献金者名簿に、お名前の掲載を希望されない方は「匿名希望」とお書き下さい。



人口の約80%が村落地域に住むネパールにおいて、緊急シェルター支援、および全国的に長期にわたる復興支援を展開していくためには、強力な協調関係と息の長い関わりが必要です。

皆さまのお気持ちをお寄せ下さいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。



ネパールにおける支援活動の様子